



LAZONA^{ラゾーナ} 藤尾歴史散歩

藤尾学区まちづくり協議会 歴史文化部会



第11回 逢坂の関と常夜燈

逢坂関については、延暦14年(795年)以前に「劔(せん)」と呼ばれる交通規制のための何らかの施設(詳細は不明)が置かれたことがわかっており、天安元年(857年)には、龍華・大石とともに相坂(逢坂)に関が置かれ、建物も存在していたと思われます。平安京を守るための軍事施設の役割を担った時期もあり、東海道の鈴鹿関、東山道の不破関とともに国の有事の際、多数の兵士を率いた固関使が派遣される関として、平安時代の末期まで位置づけられていました。鎌倉時代の「石山寺縁起絵」第三巻には、菅原孝標の娘の一行が逢坂関を越える段があり、そこに関所の施設らしい柵や小屋が描かれています。都の東の出入り口に位置し、都を離れる人々の送別の場所でもあったことから、送別の感慨をこめた和歌も数多く詠まれています。

関所の位置については不明な点も多く、その位置は確定されていませんが、現在の国道1号線の峠に跡碑が建てられています。この石碑は、滋賀県が昭和7年に建立したのですが関跡とする確証はありません。



江戸時代、逢坂越えを通る旅人の足元を照らすために設置されたもので、大谷町の常夜燈は、寛政6年(1794年)建立のもので、その檣の部分に「施主 大津米屋中」として、4名の名前が刻まれており、逢坂越えを利用することがもっとも多かった大津の米屋たちの寄進であったことが分かります。

この常夜燈は、以前は現在の場所から西方向の国道一号線と旧東海道の分岐点にありましたが、トラックに当てられる事故があって笠部分が壊れたため、現在地に移動されてから新たに造られた笠が載せられています。

この常夜燈から浜大津方向に約10分行くと、国道一号線沿いにも同年建立の常夜燈が残されています。

(文・松井佐彦)

関を
行き
かう
旅人
を守る
藤尾
の
灯

バックナンバーご希望は市民センターまで

